語学教育研究論叢第21号

“向／朝”の用法について

高橋　弥守彦

On the Usage of *“Xiang, Chao”*

TAKAHASHI Yasuhiko

内容提要

一般来说，“向”和“朝”根据其词义及句中的位置可以分为两类：动词和介词。以下引用的『八』所举的词汇分类也是这样（p. 41, 374）。

○ 这间屋子坐北朝南(動詞／動詞)

○ 舰队朝海岛驶去(介詞／動詞)

○ 小丰进来，大伙儿都朝着他笑(介詞／動詞)

○ 目光转向了我(介詞／動詞)

○ 你们需要什么，向我们要好了(介詞／介詞)

○ 向老师借了一本书(介詞／介詞)

笔者根据它们在句中的意义和语言事实，把“向”分为动词和介词。“向”作为动词时，具有运动义，表示具体的场面；而作为介词时，则不具有运动义，表示抽象的概括。其词汇分类如上举六例：圆括号里斜线左边的分类是『八』的观点，右边的是笔者的观点。另外，『八』在将“向”和“朝”作比较时指出，“向”都可以代替“朝”。

根据笔者的分类，“向／朝”作为谓语动词时，都表示面对义、瞄准义

和移动义；“向”作为补语动词时表示到达义、瞄准义和移动义，它们都具有运动义；而“向”作为介词时则表示对象和出所的标志，它们不具有运动义。

目　次

0．はじめに
1．“向”と“朝”の各用法
2．“向”と“朝”の用法上の異同
3．おわりに

0．はじめに

先行研究によれば、“向”と“朝”とには動詞と介詞としての用法がある[1)]。両者は語彙的な意味と用法とがよく似ていて、どこにその違いがあるのかが分かり難いので、その異同を調べる必要があるであろう。筆者はまず、“向”[2)]と“朝”[3)]を先行研究と言語事実に基づき分析した。先行研究と筆者の分類基準が異なることにより[4)]、両者の間にはかなりの異同があった。筆者の分析によれば、“向”は先行研究と同様、動詞と介詞としての用法が認められるものの、その内容となると、両者の間ではだいぶずれがある。その理由を明らかにしなければならないであろう。特に“朝”にいたっては、筆者の分析によれば、動詞としての用法は認められるものの、介詞としての用法は、ある一部の地域の会話の中には認められるが[5)]、筆者が収集した書面に記載されている言語事実の中にはなく、先行研究でも介詞としての用法の一部に対して、それを認める立場とそうではない立場とに分かれ、言語事実もまだ一致しているとは言い難いようである[6)]。これらの点から、これまでに介詞として挙げられている“朝”の用法については、さらに今後の観察を必要とするであろう。

これらの先行研究と言語事実に基づき、本稿では次の２点を分析の対象とする。

i．“向”と“朝”の各用法

ii．“向”と“朝”の用法上の異同

1．“向”と“朝”の各用法

“向”に対する各先行研究の分析は、基本的には一致している。その中で最も詳しく体系的にまとめてあるのが《侯》である。《侯》の観点を図表化し、その例文を挙げる。

[表1]動詞と介詞としての“向”

- “向”
  - 動詞――説明なし(例1)
  - 介詞
    - 動作行為の方向を表す
      - 状況語となる(例2.3)
      - 補語となる（例4)
    - 行為・動作の対象を表す
      - 行為(“対”)を表す（例5)
      - 動作(“朝”)を表す（例6）
      - 出所(“从…那里”)を表す(例7)

（1）面向大家（《侯》p. 598)

顔がみんなの方を向いている（筆者訳)

（2）向前看（《侯》p. 597)

前を見なさい（筆者訳)

（3）向东走(《侯》p. 597)

東の方へ行く（筆者訳)

（4）小船划向对岸（《侯》p. 598)

小船は対岸に向かっている（筆者訳)

（5）向你们致敬（《侯》p. 598）

あなたたちに敬意を表します（筆者訳）

（6）他向我瞧了半天（《侯》p. 598）

彼は私をずっと見ていた（筆者訳）

（7）向一个亲戚借了一万元（《侯》p. 598）

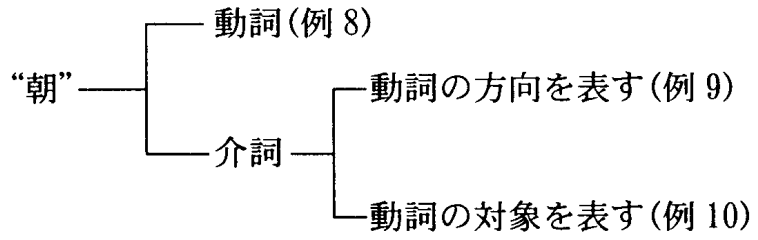
親戚の人から一万元を借りた（筆者訳）

《侯》によれば、例(1)のみが動詞であり、例(2)から(7)まではいずれも介詞としての用法である。“向”を動詞と介詞とに分けるこの分析は、文中における“向”の意味と位置に基づいている。しかし、《侯》があげるこれらの例文の中でも、例(4)は“小船划向了对岸”とも言え、例(6)は“他向着我瞧了半天”とも言える[7]。即ち、文の表す意味によって、《侯》の言う介詞“向”の後には、動態助詞の“了”や“着”を用いることができる。『八』の中では、動詞と認める“向”の例“葵花是向着太阳开的,所以学名叫向日葵”(p. 373) と、介詞と認める“向”の例“向着西南飞去”(p. 373) の後ろに、いずれも動態助詞“着”が用いられている。さらに『八』の中では介詞“向”の後に用いる客語が、単音節方位詞でなければ、“着”を用いることができると説明している[8]。また、介詞と認める“向”の例“目光转向了我”(p. 374) の後にも“了”が用いられている。

“向”を動詞と介詞とに分ける各先行研究は、既述のように“向”の意味と位置に基づいている。“向”の意味と位置によってのみ、“向”を品詞分類するのであれば、先行研究の中で、“向”はすでに体系的に整理されている。先行研究の分類に従っていれば、問題は起こらないが、この分析では前述した介詞“向”の後ろになぜ動態助詞の“了”や“着”を用いることができる場合があるのかの説明が難しい。なぜなら動態助詞“了，着”は動詞の後ろに用いられ、“了”は運動の実現を表し、“着”は運動の継続を表すからである。即ち、動態助詞の“了，着，过”の前の単語は一般に動詞または形容詞でなければならない。先行研究の説明では、介詞“向”の後ろになぜ“了,着”が用いられるのかという

疑問が残る。“朝”についても同様のことが言える。“朝”についても、各先行研究の分析は基本的に一致している。各先行研究に基づいて、“朝”を体系的にまとめると、次のように図表化できる[9]。

[表 2]　動詞と介詞としての“朝”



(8)这间屋子坐北朝南（『八』p. 41）
　この部屋は南向きだ(同上)
(9)舰队朝海岛驶去（『八』p. 41）
　艦隊は島に向かって進んで行く(同上)
(10)小丰进来，大伙儿都朝着他笑（『八』p. 41）
　豊くんが入ってくると、みんなは彼に笑顔を向けた(同上)

既述のように介詞は、その後ろの名詞が出来事との関係で、どのような役割を果たしているかを表すだけの標識であり、運動とは関わりがない。それにも関わらず、各先行研究とも“朝”の後ろの客語が単音節方位詞でなければ、介詞“朝”であっても“着”を用いることができるという説明をしている[10]。この説明は動詞と介詞との分類を曖昧にさせている。なぜなら、介詞は客語がどういう意味と機能を有している名詞なのかを表すだけの標識であり、運動とは無関係なので、介詞の後ろには動態助詞を用いることができないからである。動詞はそれに対し運動を表すので、運動の一局面を機能的に表す動態助詞“了，着，过”を動詞の後ろに用いることができる。“向”と“朝”との動詞と介詞としての用法はよく似ている場合があるものの、その後ろに動態助詞を用いることができるか否かで、両者は異なっている。

筆者は“向”と“朝”の語彙的な意味と文法的なふるまいとによって、“向”と“朝”を先行研究とは異なる分類をし、次のように図表化する。また、各用法に基づく例文をその後ろに挙げる[11]。

［表３］“向”の品詞分類と各用法

- “向”
  - 動詞
    - 述語動詞
      - 対面義（例 11）
      - 照準義（例 12）
      - 移動義（例 13）
    - 補語動詞
      - 到達義（例 14）
      - 照準義（例 15）
      - 移動義（例 16）
  - 介詞
    - 対象の標識（例 17）
    - 出所の標識（例 18）
  - 副詞
    - 以前から今までの時間の長さ「昔から」の意（例 19）

(11) 谢屋是个几千人的大村，面向平原，北靠山丘。(8-3-93)
謝屋は、数千人の人が住む大きな村で、平野に面し、後ろに丘をひかえています。(8-3-92)

(12) 不料，她又向着王力问：“王力听清了吗？”(3-1-95)
なのに、また王力に聞くなんて。「王力、わかりましたか？」(同上)

(13) 警察笑着摇摇头，突然跳起身，“嘣”地关门，也向球场跑去。(8-4-93)
やれやれと笑っていた巡査も、飛び上がって「バン」とドアを閉め、スタンドの方へ走って行った。(同上)

(14) 正是旺季，赶集的乡民背的背、挑的挑，一筐筐、一担担黄澄澄的柚子堆满街头，伸向路边。(7-6-111)
ザボンはちょうどいまが旬だった。かごにせおい、あるいはてんびん棒でかつがれてきた黄色いザボンが、市場をうずめつくし、道ばたに

までは みだしている。(7-6-110)

(15) 突然，他的手指向了端坐在一边的Ｂ角：“你上！”　(12-4-124)

突然、彼は隅に座っていたプリマのＢを指さして言った。「君がやりなさい！」(12-4-130)

(16) 这时，师生们正涌向操场，做课间操去了。(3-1-95)

ちょうど、先生や生徒がグランドにラジオ体操しに行くところだった。(3-1-96)

(17) 他既已向秘书作了如此交待，就等大功告成。(6-7-96)

秘書にはそう説明したのだから、あとは大効果があがるのを待てばよい。(6-7-97)

(18) 爸爸得像我一样，伸手向妈妈讨钱。(4-8-98)

ボクと同じように母からお金をもらいます。(同上)

(19) 他对医道向有研究。(『高１』p. 531)

彼は昔から医学に詳しい。(同上)

［表４］“朝”の品詞分類と各用法

“朝”―述語動詞―┬― 対面義（例 20）
　　├― 照準義（例 21）
　　└― 移動義（例 22）

(20) 昨天大门朝东，可今天却朝了南了。(「高 4」p. 29)

昨日まで表門は東向きであったが、今日は南向きになっている。(同上)

(21) 娘咧着嘴笑，眼睛却朝炕下直瞟去。(6-4-96)

かあさんは口を横にして笑みを浮かべているが、眼はオンドルの下に向いたままだ。(6-4-96～97)

(22) 突然，她下了讲台，径直朝会场外走去。(12-2-109)

すると突然、彼女は演壇をおり、そのまま会場の外に消えてしまった。

(12-2-112)

上記の筆者の分析によれば、“向”と“朝”の各用法は次のように図表化できる。

[表5]の“向”と“朝”の各用法

単語	“向”	“朝”
述語動詞	11, 12, 13	20, 21, 22,
補語動詞	14, 15, 16,	
介　　詞	17, 18	
副　　詞	19	

2.“向”と“朝”の用法上の異同

[表5]によれば、“向”と“朝”の述語動詞としての用法はどちらにもあるが、“向”にある補語動詞・介詞・副詞としての用法が“朝”にないことは一目瞭然である。述語動詞としての“向”と“朝”はいずれも具体的な場面性のある出来事の中に用いられ対面義・照準義・移動義を表している。『八』によれば、“朝”はすべて“向”で代用できるが、“向”はすべて“朝”で代用できるとは限らないという説明がある[12)]。筆者の分析によれば、この説明のうちの“朝”がすべて“向”で代用できるというのは、述語動詞としての用法である。“向”が“朝”で代用できるとは限らないという説明は、“向”の補語動詞・介詞・副詞としての用法である。この3つの用法は“朝”の用法の中にないので、“朝”では“向”のこれらの用法を代用できない。

この[表5]から述語動詞として使われる“向”と“朝”は、まったく同じように使われるのかどうかという問題と、“朝”にはなぜ補語動詞・介詞・副詞としての用法がないのかという問題が浮かんでくる。

まず、“向”と“朝”に共通してある述語動詞の用法の中で、両者にはどのよ

うな違いがあるのかを検討してみよう。現代漢語の中で、“向”と“朝”に共通している述語動詞としての用法は、古漢語の中では“向”に述語動詞としての用法があるものも、“朝”には述語動詞としての意味がない。“朝”が述語動詞としての意味を獲得するのは、ずっと後世になってからだと言える[13]。古漢語の“向”は「空気の流れる方向の意から、ある方向にむく意に用いる」[14]と説明されている。これは筆者の分析による照準を表す出来事の中に見られる用法である。即ち、「むく」の意味は「空気の流れる方向の意から」派生したという指摘である。この点から言えば、空気の流れる方向を表す“向”の基本義は移動義の「向かう」だと言える。「向かう」と「向く」には運動が認められるので動詞と言える。現代漢語の中の“向”は言語事実の中では移動義と照準義を表す用法が圧倒的に多く、対面義を表す用法は今回の収集でわずか数例しか見られなかった[15]。“朝”は照準義と移動義を表す用法が多く、対面義を表す用法は“向”より多いものの、やはり数例しか見られなかった。しかし、参考文献の中には相当数あった[16]。聞き取り調査でも対面義を表す場合は“朝”を使い、“向”はめったに使われないと言うことであった[17]。この点から言えば、“朝”の基本義は出来事が対面義を表す「むいている」だと言える[18]。

今回収集した“向”と“朝”の例とでは“向”の方が多く、“朝”は“向”の三分の一程度であった。述語動詞の用法だけを比較しても、“朝”は“向”の二分の一程度の例しかなかった。これらの点から、述語動詞として用いられる“向”と“朝”の用法であっても、“向”は方向と照準を表す出来事の中に多く用いられ、対面を表す中にはめったに用いられないと言える。また、収集した言語事実では、“向”は照準より方向を表す出来事の方により多く用いられていた。この点からも、“向”の基本義は「向かう」だと言える。“朝”は照準と方向を表す出来事の中によく用いられ、対面を表す場合はそうたくさんあるわけではないが、“向”に比べると参考文献の中には例文がかなりあった。今回、収集した言語事実の中では、“朝”を用いる出来事が照準と方向を表す場合はほぼ同数であった。これらの点から、“朝”は対面義を表す場合によく使い、移動義と照準義を表す場合は“向”も“朝”もよく使われるが、どちらかというと“向”の

ほうが“朝”より多く使われる傾向にあると言える。

次に、“向”には補語動詞・介詞・副詞としての用法があるのに、“朝”にはなぜこのような用法がないのかを検討してみよう。

補語動詞として用いられる“向”は到達(例 14)・照準(例 15)・方向(例 16)を表す出来事の中に用いられる。到達・照準・方向に共通する意味は動態義である。補語動詞としての回数は出来事が方向・照準・到達を表す順に用いられるが、到達を表す場合はめったにない。これは“向”の基本義が異空間に移動する「向かう」の意味であることと密接な意味関係がある。動態義のまったくない対面義を表す“向”は補語動詞としては用いられていない。これらの点から補語動詞として使われる“向”には動態義があると言える。

移動を表す「向かう」が基本義である“向”に対し、“朝”の基本義は出来事が対面を表す「向いている」の意味である。“朝”も照準・方向を表す出来事の中に用いられるが、これらはあくまでも後ろの出来事と共に用いられる場合であり(例 21, 例 22)、動詞としての“朝”の基本義である対面を表す「向いている」は静態義であり(例 20)動態義がない。前述するとおり、基本義が「向かう」の“向”は、補語動詞として使われる場合も、出来事は方向・照準・到達を表し、いずれも動態義がある。これに対し、“朝”の基本義は対面義であり、動態義がないので、方向・照準・到達を表す出来事の中に補語動詞として使えない、と言える。

筆者が分析した介詞としての“向”は二類ある。この二類は[表 3]によれば対象(例 17)と出所(例 18)の標識を表し、運動義がないので、“着”を用いることができない。介詞としての“向”は主体の行う出来事の対象と出所の標識を表す。出来事はこの場合、概括的なまとまり性のある行為と獲得を表す。それに対し、述語動詞としての“向”は例(11)(12)(13)に見られるように、主体の行う出来事が具体的な場面性のある対面義・照準義・移動義を表す。しかし、具体的な例文になると、主体の行う出来事の対象を表す標識としての介詞“向”と具体的な場面性のある照準義を表す動詞としての“向”はよく似ていて、なかなか区別しにくい。次の 2 例を見ていただこう。

(23) 他向我问了两个问题。(『李』p. 242)

彼は私にふたつ質問をしました。(同上)

(24) 他向我笑了笑，没有说什么。(『李』p. 241)

彼は私ににこりとしただけで、なんにも言いませんでした。(同上)

『李』によれば、例(23)と(24)の“向”はいずれも介詞である。この説は『李』だけではなく、他の先行研究も『李』と同じ見解を示している[19]。筆者はこの説に対し、例(23)の“向”は出来事“向我问了两个问题”が概括的なまとまり性のある主体の行為を表し、“向”は「～に」の意味であり、具体的な運動義がなく、虚化していて、動態助詞“着”を用いることができないので、介詞とみなしている。それに対し、例(24)の“向”は「向く」の意味であり、客体“我”に対する主体“他”の具体的な場面性のある運動義の中の照準義を表しているので、動態助詞“着”を用いることができる。動態助詞は運動義のある動詞や形容詞に用いられるので、例(24)の“向”を 動詞とみなす。即ち、筆者は“向”の後ろに動態助詞“着”が用いられるか否かという文法的なふるまいにより、“向”を動詞か介詞かに区分している。もう一つの介詞としての用法は出来事が獲得を表す中で、客体が主体の獲得を表す出所となっている次の用法である。

(25) 他向我借了一辆车。(『李』p. 241)

彼は私から車を一台借りました。(『李』p. 242)

例(25)は出来事“向我借了一辆车”が概括的なまとまり性のある獲得を表している。この用法の“向”はやはり具体的な運動義がなく、「～から、～に」の意味であり、虚化しているので、動態助詞“着”が用いられない。出来事が獲得を表す用法は動詞の中にないので、この用法の中に用いられる“向”は介詞である[20]。

副詞としての“向”(例19)は“一向”や“向来”の“向”の意味であり、昔から今までの時間の長さを表す。“朝”にはまったくこの用法がないので、“朝”

は副詞としては用いられていない。

3．おわりに

本稿では“向／朝”の表す語彙的な意味と文法的なふるまい、および出来事の表す意味関係から、品詞分類では[表３]に示すとおり、“向”を動詞・介詞・副詞の三類に分け、動詞はさらに“向”の使われる文中での位置から述語動詞と補語動詞の２類に分類した。“朝”は分析の結果、ある一部の地域で使われる用法を除いて、[表４]に示すとおり、すべて動詞とした。“朝”の基本義は静態義であり、動態義がないので、移動義を表す補語動詞としては用いることができない。また、“朝”は一般的には具体的な場面性のある運動義を表せるだけであり、概括的なまとまり性のある出来事を表すための文法的な意味を表す用法がないので、介詞としての用法もない。このような“向” と“朝”の各用法と異同は[表５]に示すとおりである。なお、実例としては“朝”の使われる回数は“向”の三分の一程度である。

[表５]によれば、述語動詞として使われる場合だけ、“向”と“朝”は同じように使われる。述語動詞として使う“向／朝”は出来事が対面・照準・方向を表す場合に使われ、それぞれ対面義・照準義・移動義を表す。述語動詞としてこれらの運動義を表す場合は同じように使われるが、対面義を表す場合は“朝”を使う方が多く、照準義と移動義を表す場合はどちらも使われる。しかし、どちらかというと移動義と照準義を表す場合は、“向”の方が “朝”より多く使われる傾向にある。これは“向”の基本義が移動を表す「向かう」であり、“朝”の基本義が対面を表す「向いている」だからである。

注

1）.『八』(1992)、《北》(1982)、《曲》(1992)、《王》(1998)、《侯》(1998)はいずれも“向”と“朝”を動詞と介詞とに分けている。

2）.「高$_{2}$」(2001a)、「高$_{7}$」(2003) では、語彙的な意味と文法的なふるまいか

ら「“向”＋客語」の“向”を動詞と介詞とに分類している。

3).「高$_4$」(2002a) では北京と東北のかなりの地域に見られる「“朝”＋客語」の介詞としての“朝”の用法を除いて、運動義があることにより、本構造の“朝”をいずれも動詞とした。

4). 先行研究では文中における“向”と“朝”の意味と位置に基づいて、“向”と“朝”をそれぞれ動詞と介詞とに分類している。筆者は文中における“向”と“朝”の語彙的な意味と文法的なふるまいにより、“向”を動詞と介詞とに分類し、“朝”を動詞としている。先行研究と筆者の“向”と“朝”に対する異同については「高$_6$」(2003)で詳述している。

5).〈西〉(1999) では“我想朝他借一本书。”、『大』(2000) では“我朝他借了两本书”をそれぞれ挙げ、“朝”の介詞としての用法を認めている。『八』(1992) では“向老师借了一本书”の中の“向”に替えて“朝”を用いることができないとしている (p. 41)。『李』では非文の例として“他朝我借了一辆车”(p. 242) を挙げている。すなわち、『八』と『李』とは“朝”の介詞としての用法を認めていない。この異なる言語事実の詳細については「高$_6$」で説明している。

6). 筆者の行った調査によれば、北京と東北地方には“朝”のこの用法があるが、南方と北方の一部の地域にはこの用法がない。

7).“他向我瞧了半天”は筆者の分析によれば照準義を表す動詞としての“向”なので、その後ろに動態助詞の“着”を用いることができる。

8).『八』では「‘向’の後ろに‘着’を付けることができるが、単音節の方位詞と組み合わせるときには付けることができない」(p. 373) と説明している。

9). [表 2]は『八』に挙げる例文(p. 40)を図表化したものである。他の観点も基本的には『八』と同様である。

10).『八』では介詞“朝”について「《付》着　ただし単音節の方位詞と組み合わせるときは不可」(p. 41) と説明している。《侯》では“他朝着北边(×北)看”(p. 84) の例を挙げ、“朝着”が単音節方位詞とは共起できないことを

明らかにしている。

11). [表３]の“向”の品詞分類と各用法、およびそれに伴う各例文は「高$_6$」(2003)に基づいている。

12). 『八』では「‘朝’を用いる文に‘向’を用いてもよい」(p. 41) という説明がある。

13). “古汉语”にはこの用法がないが、“现代汉语”にはこの用法が見られる。

14). この説は『吉』(1984)にある(p. 176)。

15). 参考文献の中で“向”が対面義を表している例文は『荒』(1995)が次の一例を挙げるだけであった。実例の中にもごくわずかしか見られない。

屋门向西。(『荒』p. 702)

部屋のドアが西に向いている。(同上)

16). 対面義を表す“朝”の用法は参考文献の中に相当数あった。

这间屋子坐北朝南(『八』p. 41)

这所房子朝南开门，朝东开窗。(『王』p. 30)

17). 聞き取り調査では対面義を表す注 16) の上記２例は“向”を使っても意味は通じるが、一般には習慣的に“朝”を使うということであった。

18). “向”と“朝”を対面義に使う用法はあまり多くないが、実例では対面義を表す場合は、一般に“朝”が用いられていた。

19). 『八』では例(23)の“向”に類する用法を介詞②として「動作の対象を導く」(p. 374)と説明し、例(24)の“向”の用法を例①として「名詞と組み合わせて、動作の方向を示す」(p. 373)と説明し、“朝着前面大声叫喊”の例も挙げている。

20). 筆者の分析によれば、出来事“向我借了一辆车”が獲得を表すのは“向”が介詞として使われる用法しかない。この用法の“向”は物“一辆车”の出所“我”を表す標識である。なお、出来事が獲得を表す介詞“向”は北京と東北のかなりの地域で“朝”を用いることができるものの、それ以外の地域では介詞“朝”のこの用法はまだ見られないので、今後の観察がさらに必要であろう。

資料と例文

1）水仙(1984)水上勉著、柯森耀译注，上海译文出版社，1984.10

2）菜穂子(1984)崛辰雄著，吴大有译注，上海译文出版社，1984.12

3）ショートショート(1988)程枫等著，人民中国杂志社，1988.1~12

4）ショートショート(1989)李玲等著，人民中国杂志社，1989.1~12

5）ショートショート(1990)李敬寅等著，人民中国杂志社，1990.1~12

6）ショートショート(1991)杨华敏等著，人民中国杂志社，1991.1~12

7）ショートショート(1993)赵冬等著，人民中国杂志社，1993.1~12

8）ショートショート(1994)凌鼎年等著，人民中国杂志社，1994.1~12

9）ショートショート(1995)航鹰等著，人民中国杂志社，1995.1~12

10）ショートショート(1996)关继尧等著，人民中国杂志社，1996.1~12

11）ショートショート(1997)林如求等著，人民中国杂志社，1997.1~12

12）中国語学講読シリーズ①～⑥（1991），刘家林等著，柯森耀译，外文出版社

13）中国当代优秀童话选上・下(1991)，柯玉生编，新雷出版社，1991.11

14）文芸副刊・中国語の環第40号～48号、敖友余等著，竹島毅等整理，1997.6～1999.6

15）中日対訳コーナー・北京週報，2000.1.4～2000.12.12

※例文の末尾に(8-3-93)と記してあれば、上記資料８の３月号の93頁の意。上記に挙げた資料以外の引用例であれば、やはり例文末尾の括弧の中に資料名の略称と頁数が挙げてある。出典の記していない例文は、筆者が作例し、大東文化大学非常勤講師の王学群・趙昕・鄭曙光の３先生が手を加えて下さったものである。論文作成にあたっては中原裕貴先生に大変お世話になった。ここに記し、４先生に感謝の意を表す。また、中日対訳研究会月例会で発表した際には多くの先生方から貴重な意見を頂いた。併せて感謝の意を表す。

主要参考文献と略称

1．荒屋勸(1995)『中国語常用動詞例解辞典』，光生館　『荒』

2．大内田三郎(2000)『中国語文法参考書』，駿河台出版社　『大』

3．王　自强(1998)《现代汉语虚词词典》，上海辞书出版社　《王》簡能道明(1955)『増補字源』，角川書店　『簡』
4．郭春貴 (2001)『誤用から学ぶ中国語』，白帝社　『郭』
5．簡能道明 (1955)『増補字源』，角川書店　『簡』
6．曲阜师范大学本书编写组编著(1992)《汉语常用虚词词典》，浙江教育出版社　《曲》
7．金　昌吉(1996)《汉语介词和介词短语》，南开大学出版社　《金》
8．侯　学超编(1998)《现代汉语虚词词典》，北京大学出版社　《侯》
9．吴　为章(1993)《动词的“向”札记》《中国语文》1993年第3期　《吴》
10. 高橋弥守彦・姜林森・金満生・朱春躍 (1995)『中国語虚詞類義語用例辞典』，白帝社　『高１』
11. 高橋弥守彦(2001)「“向”＋客語の“向”の用法について」『語学教育研究論叢』第18号，大東文化大学語学教育研究所「高２」
12. 高橋弥守彦(2001)「“向”＋客語における“向”の日本語訳」『日中言語対照研究論集』第３号，日中言語対照研究会「高3」
13. 高橋弥守彦 (2002)「“朝”＋客語の“朝”の用法について」『日中言語対照研究論集』第４号，日中言語対照研究会「高4」
14. 高橋弥守彦 (2002b)「“朝”＋客語の“朝”の日本語訳」『桜文論集』第55号，日本大学法学部　「高５」
15. 高橋弥守彦(2002c)「移動を表す動補連語“走进来”について」『外国語学研究』第３号、大東文化大学大学院外国語学研究科「高６」
16. 高橋弥守彦(2003)「“向”再考」　中国語教育学会第１回大会発表資料，2003年３月27日　日本大学文理学部百周年記念館２階　国際会議場　「高７」
17. 陈昌来(2002)《介词与介引功能》，安徽教育出版社　《陈》
18. 西槙光正 (1999)〈介词“朝、向、往”语法分析比较研究〉，『語学研究』第92号，拓殖大学言語文化研究所　〈西〉
19. 傅雨贤・周小兵・李炜・范干良・江志如(1997)《现代汉语介词研究》，中山大学出版社　《傅》

20. 北京大学中文系 1955～1957 级语言班编(1982)《现代汉语虚词例释》，商务印书馆　《北》
21. 方　福仁(1982)〈谈“去”和“向”的“在”义〉《中国语文》1982 年第 2 期　《方》
22. 孟　庆海(1983)〈介词短语“向＋名”〉《汉语学习》1983 年第 6 期，延边大学出版社　〈孟〉
23. 吉田賢抗編(1984)『新釈漢和辞典』新訂版　明治書院
24. 李臨定著／宮田一郎訳 (1993)『中国語文法概論』，光生館　『李』
25. 吕叔湘主編／牛島徳次監訳・菱沼透訳 (1992)『中国語用例辞典』，東方書店　『八』
26. 刘月华主编(1998)《趋向补语通释》，北京语言文化大学出版社　《刘》